

2. 平和金箴製作所について

道路沿いからみえる「平和金箴製作所」の看板

今治市蔵敷町にある平和金箴製作所は、蔵敷唐子台線につながる道路沿いに面している。今治城に近いこの周辺は、かつて武家屋敷が多くあった場所であり、明治期に入ると今治の綿織物業を牽引した（株）興業舎  や阿部（株）  が設立され、早くから近代化が進んだ。とは言うものの、平和金箴製作所が自宅兼作業場を構えた1960年頃は、落花生畑が広がる畑作地帯だった。その後、JR今治駅から徒歩10分程度の蔵敷町は市街地として整備され、現在は人や自動車が頻繁に行き交うため、「平和金箴製作所」の看板は多くの人の目に止まりやすい。通りすがりの人が、「ここは何をつくるどころ？」と尋ねてくることもしばしばある。



道路沿いに面した平和金箴製作所

平和金箄製作所は、豊田洋子氏の父親・兼光氏によって1959年💬に創業されたが、これ以前に兼光氏は実兄の秋信氏とともに豊田金箄製作所を創業し、そこで箄職人としてキャリアを積んでいた。豊田金箄製作所時代は、秋信氏がおもに外部との交渉を担当し、兼光氏が箄を製作した。独立して平和金箄製作所を創業するときには光子氏と結婚しており、光子氏も即戦力として事業に携わった。

兼光氏は、1970年に大阪市の亀田鉄工所💬から新しい金箄編箄機を購入した。これは、シャトル織機用箄の生産の合理化を図るためであった。シャトル織機用箄の原料は鉄が主流であり、兼光氏は溶接を含む鉄工の技術にも長けていた。兼光氏の手がける箄は産地で評判となり、今治では遅れての開業ながら多くのタオルメーカーと取引するようになった。こうして、創業以来、平和金箄製作所は産地内取引に特化し、タオル専門の箄メーカーとして産地の発展に貢献した。



現在も稼働している亀田鉄工所の機械

平和金箴製作所の創業は、今治が泉州と並んで日本を代表するタオル産地に成長を遂げた高度成長期である。今治では、第一次石油ショックをへて安定成長期に入った1976年に、タオルメーカーが502社となり、ピークを迎えた。これだけのタオルメーカーが今治市周辺地域に集まり、ほぼ毎日、二交代・三交代制でシャトル織機が稼働していた時代である。箴メーカーはどこも、猫の手も借りたいほど忙しかった。

今治の箴製作においてひとつの転機となったのは、1980年代の革新織機の登場である。図1と図2は、今治タオル工業組合統計「企業数、織機台数、革新織機台数、従業員数、綿糸引渡数量、生産量、輸出・輸入数量の推移」から引用した1975～1999年の革新織機の普及状況である。同統計によると、1972年に革新織機を導入した企業は1社のみだが、1975年からその数は増加していく。

図1 今治タオルにおける革新織機導入企業の推移（％）

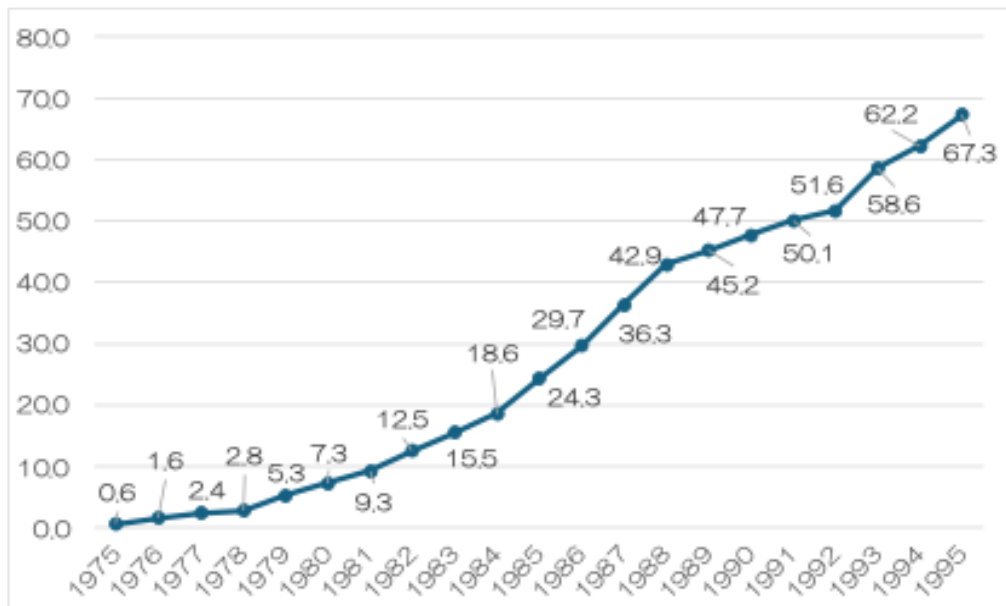
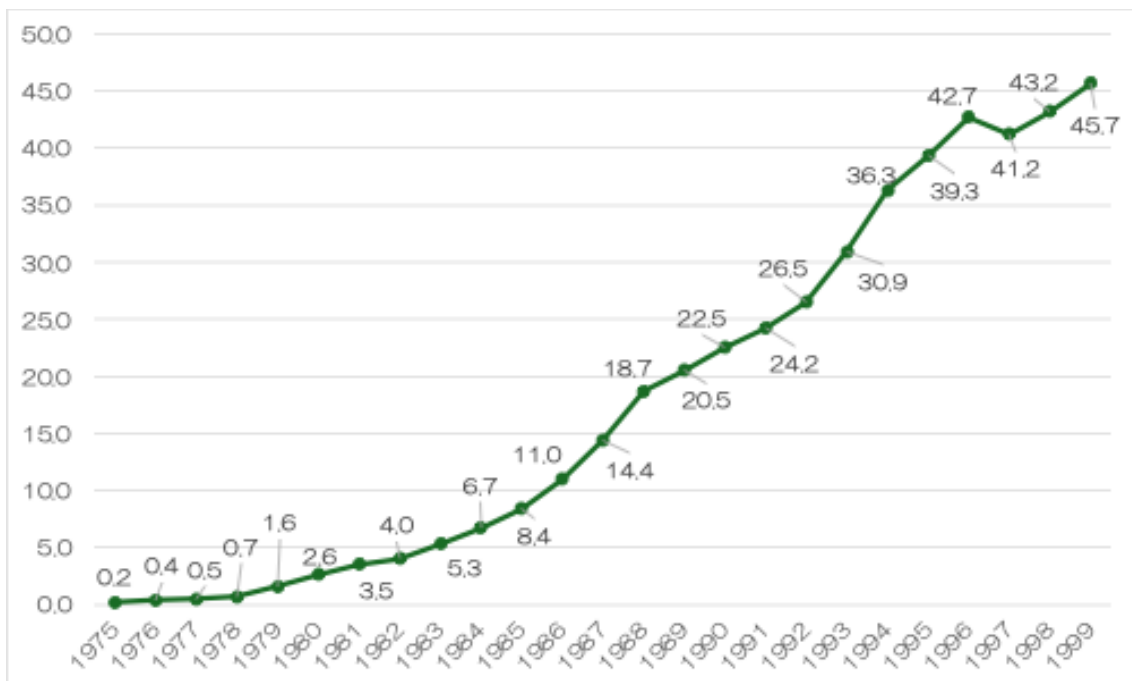


図1から革新織機を導入したタオルメーカーの割合を参照すると、1980年代に入って二桁台に突入し1985年に24.3%となった。その後も増えつづけ、1991年には50.1%となり、今治の約半

数のタオルメーカーが革新織機を導入した。1995年が統計上の最後の年となるが、この年の導入企業の割合は67.3%に上った。今治のタオル生産量のピークが1989年の50,383トンであり、その後減少に転じるが、革新織機の普及率は上昇していく。

図2 今治タオルにおける革新織機占有率の推移（％）



注：企業数は組合員・非組合員を含む。

出典：図1、図2とも、今治タオル工業組合「タオルデータ：企業数、織機台数、革新織機台数、従業員数、綿糸引渡数量、生産量、輸出・輸入数量の推移」より作成。

図2から今治タオルにおける全織機に占める革新織機の割合の推移をみると、二桁台になるのは1986年の11.0%である。その後も増加するが、1991年で24.2%、1995年で39.3%、1999年においても45.7%であり、導入企業の割合よりも遅いペースである。つまり、革新織機の導入は、コスト面を考えると一気に進んだわけではない。

革新織機のメリットは高い生産性と多色使いにあるが、シャトル織機よりもコストはかなり高い。革新織機は一台数千万円する大型設備であり、革新織機用の大型整経機も整備しなければならない。そのため、シャトル織機から革新織機への移行は、零細規模のタオルメーカーにとってかなりの負担を強いるものであり、1990年代以降のタオル不況にともない廃業したところも少なからずある。

箄メーカーにとって革新織機の登場は新たな商機であったが、従来のシャトル織機と革新織機では箄の素材や大きさ、生産工程、生産工程で使う材料も違うため、新しい知識や技術の修得のみならず機械も整備する必要があった。兼光氏は、1980年代後半頃から革新織機がこれから今治にも普及するであろうと判断し、エアージェット式を除く革新織機に対応した環境を整えた。平和金箄製作所では、産地でシャトル織機から革新織機への移行がほぼ落ち着く2000年頃まで、箄需要の増加による繁忙期はつづいた。

兼光氏の次女・洋子氏が平和金箄製作所に入社したのは1990年であり、それからおよそ10年間、多忙を極めるなかで洋子氏は父親のモノづくりを側で支えながら技術を学んだ。2000年代になると、今治タオルの低迷が平和金箄製作所でも実感できるようになった。先の今治タオル工業組合「企業数、織機台数、革新織機台数、従業員数、綿糸引渡数量、生産量、輸出・輸入数量の推移」の数値を引用すると、タオルメーカーは1997年にピーク時の約半分となる250社へ減少し、2002年には199社となり200社を切った。その後も縮小の一途を辿るが、2006年にスタートしたJAPANブランド育成支援事業による成果が2009年頃より表れはじめ、タオル生産量において若干回復の兆しをみせた。その矢先、平和金箄製作所の創業者である兼光氏は2012年4月に永眠し、その後洋子氏が事業を継承して現在に至っている。

父と母の「二人三脚経営」



幼い長女を抱く光子氏

平和金箴製作所の実質のマネジメントを担ったのは、兼光氏の妻・光子氏である。社交的であった光子氏は、寡黙だった兼光氏に代わり外部との交渉を一手に担い、また資金繰りなどの財政面でもしっかりと支えた。

洋子氏は、「母親はしっかり者で、父親が仕事に没頭できたのは母親の存在が大きかった」とおもっている。さらに言えば、父親だけでなく家族への配慮も怠らなかった。家業に忙しい毎日でも家族の時間を大切にし、とくに朝食と夕食は家族揃って必ず一緒に食べていた。

（次号につづく）

